

黙示録エッセイを書くにあたって

「ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証した。この予言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである。(ヨハネの黙示録、序文と挨拶)」

「この書物の預言の言葉を、秘密にしておいてはいけない。時が迫っているからである。不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。(ヨハネの黙示録、キリストの再臨)」

私、黍稷農季人は、名古屋の東海教会の幼稚園で、マリア様のもとで1年を過ごした。10代のころには、将来の人生を神に祈ったこともある。しかし、キリスト教徒ではなく、聖書は教養としていくらか読んだことがあるだけである。最近、旅行しているヨーロッパ各国の首都の大聖堂、田舎の教会の聖堂を訪ねて、その荘厳さに圧倒され、人々の信仰の篤さに心を温められてきた。

調査研究旅行の際に、インドやネパールではブッダガヤーをはじめ、ヒンドゥ寺院やラマ寺院、タイでは仏教寺院を数多く訪ねた。日本の寺院も数多く訪れてきし、年ごとの正月には深大寺に初詣に行っている。しかし、仏教徒でもない。パキスタンや中央アジアの国々を旅行した時には、イスラムのモスクやミナレットを訪れた。教養としてコーランも少しは読んだが、イスラム教徒ではない。

インドの友人からあなたは何を信仰しているのかと聞かれた。初めのうちは、日本人だから仏教徒かと勝手に思い込んでくださっていたので、自己の信仰について深く考えもせず、そのまま否定もせずに、微笑んで答えを濁していた。しかしながら、とても親しくなると、曖昧なままにすることができなくなった。私の信仰は自然(カミガミ)であると思いつき、アニミストであると、答えることにした。インドの親しい友人は納得して、その後、太陽を信仰する人々の村への調査に付き添ってくれた。デカン高原の奥深い村で、アワを栽培していたムンダ族の人々は私を温かく迎え、同じ信仰をもつものとして受け入れてくれた。また、北海道でも、アイヌ族の友人は私をピリカアイヌと認めてくれた。

ジャン・クリストフは生死にかかわる人生の節目ごとに、神と対話する機会に恵まれた(ロマン・ローラン 1912、『ジャン・クリストフ』)。私はキリスト教徒ではなく、ましてや畏れ多くも、ヨハネのように神から選ばれ、聖書の黙示録を書ききすことを命じられた使徒ではない。私は自己を科学者として鍛えてもきたが、何はともあれ、一人の生き物としては、できる限りカミ殺しには加担したくない。もちろん、私は地祇のご許可もなく、自然のカミガミの負託も受けてはいない。しかし、近代以降の科学技術の発展に伴う過剰な自然開発という天神地祇、八百万のカミガミの「居ます場」を破壊する機械社会文明による、

カミ殺しの所業の事実について、見るに見かねて、自分勝手に見聞したことを書き記し、
生き物の文明への希望を託すための黙示録とすることにしたい。 2012-11-11 記